

# Hemingwayにおける 太陽についての一考察

宮 田 満 雄

## I

Hemingway は、1950年、友人の A. E. Hotchner が *The Sun Also Rises* について、この作品が所謂 Lost Generation のバイブルとして完全な救いのなさに徹底していないことを指摘したのに対して次のように述べている。

That<sup>1)</sup> was Gertrude Stein's pronouncement, not mine. ... I only used it in the front of *Sun Also Rises* so I could counter it with what I thought. The passage from Ecclesiastes, that sound lost? 'One generation passeth away, and another generation cometh; but the earth abideth forever...' Solid endorsement for Mother Earth, right? 'The sun also ariseth, and the sun goeth down, and hasteth to the place where he arose...' Solid endorsement for sun.<sup>2)</sup>

*The Sun Also Rises* は、Hemingway の出世作として認められて以来、Lost Generation のバイブルとまで称され、全編に表わされる無目的な青年達の行動が、この作品をニヒリズムの作品として評価せしめることになった。又冒頭にかかげられた Gertrude Stein の有名な言葉、及び「空の空なり」で始まる有名な「伝道の書」からの引用がこの作品の主題を暗示していると広く解釈されて来た。しかし上述した作者自身の言葉は、一体どのような意味を持つものであろうか。この点を探ることは、彼の本質に迫る重要

1) "that" は "Lost Generation" という言葉を指す。

2) A. E. Hotchner, *Papa Hemingway*, Random House, New York, 1966, p. 49.

な手がかりにもなると考えられる。

彼は、1962年11月19日附の Maxwell Perkins に宛た手紙の中で、“lost generation”という言葉は、Gertrude Stein が用いた“splendid bombast”であって、そのような考え方に自分は全く賛成できない旨を伝えている。<sup>1)</sup> 又、*The Sun Also Rises* の冒頭に「伝道の書」からの引用を置いたことに関して、それは“lost generation”の如きものは存在しないということを示すために用いたのだと述べている。<sup>2)</sup> 更に又、彼が、1951年のイースターに、C. Baker に出した手紙において、自分達は“lost”ではなく、“solid generation”であったことを告白している。<sup>3)</sup> つまり、Hemingway にとっては、「伝道の書」に表わされている如く、一つの世代が過ぎれば、又、他の世代が現われてくるのであり、日が沈めば、又、次の日には昇ってくるのであって、大地のいとなみは永遠に続き、これこそが永遠の勝利であるというのである。彼は、Hotchner に対して

Nobody I knew at that time thought of himself as wearing the silks of the Lost Generation, or had even heard the label. We were a pretty solid mob. The characters in *Sun Also Rises* were tragic, but the real hero was the earth and you get the sense of its triumph in abiding forever.<sup>4)</sup>

と述べてこのことを強調している。

しかしながら、Young が、この点に関して“...few readers have felt

1), 2) Cf. Carlos Baker, *Hemingway: The Writer as Artist*, New Jersey, Princeton Univ. Press, 1963, p. 80.

Cf. Philip Young, *Ernest Hemingway: A Reconsideration*, The Pennsylvania State Univ. Press, 1966, p. 87.

3) Cf. Carlos Baker, *Hemingway: The Writer as Artist*, p. 81. Baker は更に、この事実に基づき *The Sun Also Rises* を分析し、この作品の moral norm は、a healthy and almost boyish innocence of spirit であると述べている。(p. 82.)

4) A. E. Hotchner, *Papa Hemingway*, pp. 49~50.

the force of Hemingway's intention.”<sup>1)</sup>と述べている如く、この小説から作者のこのような真意を汲みとるのは困難であるように思われる。従って、この小論は、彼の短編、長編における太陽を中心に考察することにより“solid endorsement for sun”及び、“solid endorsement for earth”なる彼の概念を探ろうとするものである。

先づ、彼の主要な短編、長編小説の中から“the sun”もしくはそれを明らかに暗示する“hot”, “heat”等の、少なくとも筆者の眼に触れた使用回数を調べると、*In Our Time* 31回、*Men Without Women* 13回、*Winner Take Nothing* 8回、*The Snows of Kilimanjaro* 4回、*The Sun Also Rises* 18回、*A Farewell to Arms* 16回、*For Whom the Bell Tolls* 40回、*Across the River and Into the Trees* 4回、*To Have and Have Not* 4回、*The Old Man and the Sea* 23回となっている。特に“Big Two-Hearted River”は*In Our Time* 全体で31回中、20回を数えている。又、比較的作品評価の高いものの中に頻度が多いのも興味を引くところである。

さて、これらの作品において実際にどのような形で「太陽」という言葉が顔を出すのか主な作品について検討していくことにしよう。

## II

先づ、作品の長さの割に頻度の多い“Big Two-Hearted River”について検討しよう。この短編が単なる釣旅行の物語でないことは、すでに多くの学者達が指摘しているところである。Nick が久し振りに Seney の町に帰って来た日は、“hot day”であり、彼が川を見おろすと、昔ながらに鱒がつつと表面に近ずき、水面にはねると陽光を浴びてきらりと光った。Nick は流れの中で平衡を保っている鱒を見て“old feeling”をとりもどすのである。彼は焼跡の Seney の町をあとに、憩いの場所を求めて重い荷を背に、強烈な太陽を身にうけ、汗ばみながら丘を登って行くのである。丘の上からの眺望は素晴らしく、川が陽光の中で招くようにキラキラ光っているのが見

1) Philip Young, *Ernest Hemingway : A Reconsideration*, p. 87.

える。彼は太陽によって自分の進むべき方角を知り、その方角へと一人で進んで行く。太陽が西に傾く頃、彼はその夜のキャンプ地に到着する。暑い日のあとで、草むらにはすでに夜露が宿り、一種の靈気をともなう。彼はこの夜ぐっすり寝むる。Malcolm Cowley は、Hemingway の物語のあるものが“nightmares at noonday”であると指摘し、この短篇はまさにそれにあたると述べている。<sup>1)</sup> 注意深く読めば、この物語の中の Nick は、何ものからか逃がれようとしていることがわかる。どんなにつらい行程であっても、そのことがすべてを忘れさせてくれると考える時、Nick は幸福だった。

It was hard work walking up-hill. His muscles ached and the day was hot, but Nick felt happy. He felt he had left everything behind, the need for thinking, the need to write, other needs. It was all back of him.<sup>2)</sup>

“Now I Lay Me”において、我々は、明るい所でなければ眠れない Nick を見出す。暗闇の中で眠れぬ夜を悶々と過ごす Nick と、今、暗闇の夜にもかかわらず、大自然の中で、一人ぼっちの彼が怯えることもなく、ぐっすり眠る姿の中に、この短編における自然の役割を洞察することができる。

一夜明けた次の日の朝の描写から第二部が始まる。冒頭の一節の何と美しく、又、生き生きとした描写であろう。

In the morning the sun was up and the tent was starting to get hot. Nick crawled out under the mosquito netting stretched across the mouth of the tent, to look at the morning. The grass was wet on his hands as he came out. He held his trousers and his shoes in his hands. The sun was just up over the hill. There was the meadow, the river and the swamp. There were birch trees in the green of the swamp on the other side of the river.<sup>3)</sup>

1) Cf. Ibid., p. 43.

2) *The First Forty-Nine Stories*, Jonathan Cape, London, 1954, p. 188.

3) Ibid., pp. 197~198.

一夜は何事もなく過ぎ、Nick の眼前には朝日に光る草むら、川、沼、樺の木等があった。これらを見た時の Nick の深い安緒感が、行間に溢れている。太陽は新たな生命をもたらし、丘の上に輝いていた。夜露に羽を濡らされて身動きもできないバッタも、太陽の光によって羽が乾き、跳びはじめる。

While he was picking up the hoppers the others warmed in the sun and commenced to hop away.<sup>1)</sup>

ここで一日の鱒釣が始まる。陽光を受け鱒がキラキラと光り、生命の躍動を感じる。又、釣の途中丸太にすわって煙草をふかす Nick に太陽はさんさんと降りそそぎ、彼の傷心を癒やしていくようである。

He sat on the logs, smoking, drying in the sun, the sun warm on his back, the river shallow ahead entering the woods, curving into the woods, shallows, light glittering, big water-smooth rocks, cedars along the bank and white birches, the logs warm in the sun, smooth to sit on, without bark, grey to the touch; slowly the feeling of disappointment left him.<sup>2)</sup>

Young が次のように述べる如く、この物語の Nick は傷心の Nick である。

Clearly, “Big Two-Hearted River” presents a picture of a sick man, and of a man who is in escape from whatever it is that made him sick.<sup>3)</sup>

この Nick を、太陽は終始、或る時は無関心に、或る時は癒やしの光を、或る時は生命の光を放ちつつその出たところへ帰り、又昇り来るのである。

1) Ibid., p. 198.

2) Ibid., p. 204.

3) Philip Young, *Ernest Hemingway: A Reconsideration*, p. 47.

又、自然は **Nick** に安住の場を提供する。**Hemingway** の他の主人公同様、<sup>1)</sup> **Nick** も、この太陽の下にひっそりと存在する自然の溪流のそばに “where he was going” を発見していたのである。

### III

*The Sun Also Rises* においても、我々は、太陽の存在を無視できない。**Jake** は **Brett** の帰ったあと、グラスを片付けベッドにもぐりこむ。何ともいえない淋しさと空虚さが彼の心を占めている。彼は泣きそうな気持だった。そして悶々の夜を送るのである。しかし、その翌日は、前夜の **Jake** の心とは好対照をなす晴れ渡った日であった。

It was a fine mornig. The horse-chesnut trees in the Luxembourg gardens were in bloom. There was the pleasant early-morning feeling of a hot day.<sup>2)</sup>

或る意味では、その朝の美しさ、楽しさ、すがすがしさは、先夜の **Jake** の心を一層浮彫にしているといえる。又別の見方をすれば、登場人物の織りなす様々な人間模様の如何を問わず自然は自らの法則に従って動き、太陽はこれらの悲しみや、悩みや、喜びに無関係に昇り又没するという点を強調しているとも解せられる。**Jake** 達の一行は **Burguete** に釣に出かける。途中、汽車の中から日没を眺める。そしてその太陽を、彼等は **Bayonne** の町で美しい朝日として仰ぐことになるのである。<sup>3)</sup> **Baker** が指摘する **Burguete**—

- 1) Cf. *Ibid.*, p. 127. ここには **Santiago** を **Kilimanjaro** の **Harry** と対比して考え And so we could say here, as Hemingway said of Harry, that Santiago is happy in the end because he knows that “there was where he was going” と記してある。
- 2) *The Sun Also Rises, The Hemingway Reader*, Charles Scribner’s Sons, New York, 1953, p. 114.
- 3) Cf. *Ibid.*, Chapter 9, 10.

Montparnasse の対照,<sup>1)</sup> 或いは高村勝治氏が指摘される暗—明—暗の構成<sup>2)</sup> において、太陽が大きな役割をはたしていることはいうまでもない。

スペインの祝祭は、太陽に満ちあふれていた。たとえその前夜、深酒に耽っていても、早朝のすがすがしさは彼等に生気を与えた。

She had been afraid last night they would pass out. That was why I was to be sure to take her. I drank the coffee and hurried with the other people toward the bull-ring. I was not groggy now. There was only a bad headache. Everthing looked sharp and clear, and the town smelt of the early morning.<sup>3)</sup>

又、Brett は太陽のスペインで Romero との恋に花を咲かすのである。

Brett was radiant. She was happy. The sun was out and the day was bright.<sup>4)</sup>

上の文は、Hemingwayらしい文体のリズムと、“radiant”、“happy”、“sun”、“bright”等の巧みな用語とが相まって、生気に溢れたものである。

又、

We stood in the sun light. It was hot and good after the rain and the clouds from the sea.<sup>5)</sup>

という一節も、彼等がパリからぬけ出して来たその気持を、象徴的に表わしているようである。San Sebastian でも Jake は、太陽を一杯浴び水泳を楽しむ。そして、すべてが終り、Jake と Brett が町を去る時、お互いの心

1) Carlos Baker, *Hemingway: The Writer as Artist*, p. 101.

2) Cf. 高村勝治「ヘミングウェイ」研究社, 昭和30年, p. 78.

3) *The Sun Also Rises, The Hemingway Reader*, p. 245.

4) *Ibid.*, p. 255.

5) *Ibid.*, p. 256.

の中に秘められた満たされない気持とは対照的に、眩しい太陽が二人を見おろして輝いているのである。

I put my arm around her and she rested against me comfortably. It was very hot and bright, and the houses looked sharply white.<sup>1)</sup>

われわれはここで、*Kilimanjaro* の最後の部分を思い出す。

...and there, ahead, all he could see, as wide as all the world, great, high, and unbelievably white in the sun, was the square top of Kilimanjaro. And then he knew that there was where he was going.<sup>2)</sup>

*The Sun Also Rises* の最後の場面の二人も、一種の諦観は否めないにしても、彼等の行くべき所に向かって出発するのである。

#### IV

*A Farewell to Arms* は、Hemingway の象徴を研究するテキストとしてよく用いられ、その山岳や平野等の持つ象徴的な意義は、Baker あたりがあますところなく研究しているところである。この作品においても、太陽は随所に顔を出して、見逃がすことのできない効果をあげている。

It came very fast and the sun went a dull yellow and then everything was grey.<sup>3)</sup>

上記の文において、雲が足ばやに近づいて来て太陽がかげり、周囲がどんより曇った灰色につつまれ、雪になるのである。“yellow”, “grey” 等の色彩によって、場面の雰囲気を出している典型的な描写である。

Henry が再び戦線にもどった時、季節は春で、部屋の内外に太陽の光が

1) Ibid., p. 289.

2) *The First Forty-Nine Stories*, p. 82.

3) *A Farewell to Arms*, Jonathan Cape, London, 1953, p. 10.

あふれていた。

I walked down the alleyway of trees, warmed from the sun on the wall... there was a soldier sitting on a bench outside in the sun,... the window open and the sunlight coming into the room.<sup>1)</sup>

戦いの間も、太陽は、あたかも人間の小さな争いをじっと見つめるように輝いている。隣りの庭の砲列に眼をさまされた Henry が先づ見たものは太陽であった。

The battery in the next garden wake me in the morning and I saw the sun coming through the window and got out of the bed<sup>2)</sup>

敵と味方を分けている川筋は、太陽の光を受けて光り、北側には雪を戴いた峯々が陽光の中に美しく、眩しく光を放っている。

I could look down through the woods and see, far below, with the sun on it, the line of the river that separated the two armies... I looked to the north at the two ranges of mountains, green and dark to the snow-line and then white and lovely in the sun.<sup>3)</sup>

この山の描写の中に、われわれは、Kilimanjaro の眩しく輝く山頂を連想するのである。

或いは又、われわれは、夕日に黒々と浮んでいるオーストリア軍の気球の描写に、或る不気味さをおぼえ、それが日没という背景故に、一層その効果を感じるのである。

The sun was going down and looking up along the bank as we

1) Ibid., pp. 13~14.

2) Ibid., p. 18.

3) Ibid., p. 49.

drove I saw the Austrian observation balloons above the hills on the other side dark against the sunset.<sup>1)</sup>

Catherine が病室に入って来た時、彼女は部屋一杯に射し込んでいる陽光の中で、新鮮で、若々しく、美しく見え、Henry は、こんな美しい人は見たことがないと思うのであるが、ここにおいても、太陽は彼女の美しさに対する最も相応しい背景となっている。<sup>2)</sup> しかしながら、太陽が常に美しさや新鮮さの背景にのみ用いられているとは限らない。命令違反した軍曹が射殺される時も、太陽はこれをじっと非情な眼で見つめていた。軍曹の死体は、この非情は太陽の下に曝されることになるのである。

The sun was almost out from behind the clouds and the body of the sergeant lay beside the hedge.<sup>3)</sup>

この小説の興味深いところは、Henry と Catherine が、逃避行をつづけるようになって以後、太陽の頻度が少くなり、月がそれに代っているところである。Milan を離れた二人は、stresa へ向けて出発し、the Grand Hôtel des Iles Borromées に泊ることになる。二人はこの夜、深く愛し合い、わが家に帰ったような、寛いだ気持を味わうのである。彼等は二人で居る時も孤独を感じることがあったが、それは、他人に対して自分達を孤独に感じる気持であり、二人の間は固く愛の絆で結ばれていた。<sup>4)</sup> 翌朝、彼等の周囲の条件はすべて、彼等二人を祝福しているかに見えた。

I remember walking in the morning. Catherine was asleep and the sunlight was coming in through the window. The rain had stopped and I stepped out of bed across the floor to the window. Down below

1) Ibid., p. 50.

2) Cf. Ibid., p. 104.

3) Ibid., p. 208.

4) Cf. Ibid., pp. 251~252.

were the gardens, bare now but beautifully regular, the gravel paths, the trees, the stone wall by the lake and the lake in the sunlight with the mountains beyond.<sup>1)</sup>

不吉なしるしの雨は止み、太陽はさんさんと暖い光を二人に注ぎ、彼方にはどっしりと連山がひかえて、Hemingway の幸福の象徴がすべて顔をそろえている、計算されつくした美しい描写である。そして彼等は、11月の陽光が一杯射し込む中で、楽しい朝食をとるのである。

She wanted breakfast. So did I and we had it in bed, the November sunlight coming in the window, and the breakfast tray across my lap.<sup>2)</sup>

しかし、運命の神は、この二人をいつまでもこの幸福感にひたしてはくれなかった。夜になり嵐がやって来て、彼等は湖水を渡ってスイスへと逃亡を計るのである。彼等を冷く眺めるのは、太陽に代る月であった。

The rain stopped and the wind drove the clouds so that the moon shone through and looking back I could see the long dark point of castagnoba and the lake with white-caps and beyond, the moon on the high snow mountains. Then the clouds came over the moon again and the mountains and the lake were gone...<sup>3)</sup>

その月すらも、雲にかくれ、朝日の中で彼等を招く如くに立っていた連山も同時に姿を消し、彼等の運命の不吉な前途を予想させる。彼等が湖上を必死に漕ぎ渡る間中、月と雲は彼等の頭上にあり、次第に月は西に傾き、黒雲のみが彼等を覆うのである。ようやくスイスに逃がれた二人は、山のホテルに泊るが、冬を間近かにひかえて、心なしか陽の光も弱く感じられる。夜中に

1) Ibid., pp. 252~253.

2) Ibid., p. 253.

3) Ibid., p. 274.

Henry が目をさますと、月光が射し込み、ベッドの上に窓の棧の影を落している。Henry は、月光に照らし出された Catherine の顔を見ながら、又眠りにおちいるのである。この作品においても、太陽は、月と並んで実に巧みに導入され、Hemingway の artist としての面目を遺憾なく発揮している。

## V

*For Whom the Bell Tolls* においても、冒頭の一節は、夏の強い日射しをうけた松林の描写から始まる。主人公、Robert Jordan は、日光の中に立って、風雨に鍛えられた、陽焼けした美しさと、遅しさを示している。

The young man, who was tall and thin, with sun-streaked fair hair, and a wind- and sun-burned face, who wore the sun-faded flannel shirt...<sup>1)</sup>

そして、彼がこれから爆破することになる橋は、丁度スポットライトで浮き出されたように、陽光の中で不気味に静まっている。

The late afternoon sun that still came over the brown shoulder of the mountain showed the bridge dark against the steep emptiness of the gorge.<sup>2)</sup>

夜更けの山の静寂を破って、洞窟から聞えてくるジプシーの歌は、

I had an inheritance from my father,  
It was the moon and the sun.  
And though I roam all over the world  
The spending of it's never done.<sup>3)</sup>

1) *For Whom the Bell Tolls*, Jonathan Cape, London, 1954, p. 7.

2) *Ibid.*, p. 37.

3) *Ibid.*, p. 59.

というのであり、Hemingway のもつ円環思想ともいべきものを強く表わしている。

Pablo 達がファッシスト達を虐殺した時も、太陽は彼等の頭上にあり、人間共の乱暴ないとなみを見おろしていた。

いよいよ Jordan に率いられるパルチザン達が、橋を爆破する行動に入った緊張した場面においても、Jordan は、日の出の美しさと、それに伴う周囲の神秘的な自然を十分に鑑賞し、それにひたる心の余裕があった。

Robert Jordan lay behind the trunk of a pine tree on the slope of the hill above the road and the bridge and watched it become daylight. He loved this hour of the day always and now he watched it; feeling it grey within him, as though he were a part of the slow lightening that comes before the rising of the sun; when solid things darken and space hightens and the lights that have shone in the night go yellow and then fade as the day comse. The pine trunks below him were hard and clear now, their trunks solid and brown and the road shiny with a wisp of mist over it. The dew had wet him and the forest floor was soft and he felt the give of the brown, dropped pine needles under his elbows.<sup>1)</sup>

この早朝の霧に包まれた、しっとりとした自然の描写は、自然を愛した作者自身の実感であろう。そして、目標の鉄橋は霧にかすんで墨絵のように黒々と横たわっているのである。

息づまるような橋梁爆破の作業中も、太陽は彼等の頭上に輝き、その下で、五月の美しく晴れ渡った自然とは対照的な血生ぐさい殺戮が行なわれるのである。

彼等が引揚げ、Jordan と Maria の別離がおとずれた時にも、太陽は二人の上にさんさんと輝いていた。そして、一人踏み止まり、激しい鼓動を感じながら近づいてくる敵を待ちうける Jordan の上にも、太陽は非情の眼差

1) Ibid., p. 403.

しを送るのである。

## VI

*The Old Man and the Sea* において、Santiago は陽の一杯あたる Terrace の店先で、少年と昔話を楽しくしている。少年は老人にとって心の友である。この二人を太陽は、やさしく包んでいる。老人が見る夢も、目映い陽の光に照らされて白く光っているアフリカの海岸であり、ライオンであった。老人は翌早朝漁に出る。朝の冷気に身が引締まる思いをする。海上で日の出にあう。壮麗な、美しい日の出である。

It was quite light and any moment now the sun would rise. The sun rose thinly from the sea and the old man could see other boats... Then the sun was brighter and the glare came on the water and then, as it rose clear, the flat sea sent it back at his eyes so that it hurt sharply and he rowed without looking into it.<sup>1)</sup>

朝の強烈な曙光は、自分の目を傷つけて来たことを彼は思い出す。老人は、朝日は夕日に比べて“painful” だと思う。

老人は、日光が海面に作り出す様々な色の変化や雲の形で、その日の天候を読みとることができる熟練した漁師である。

The strange light the sun made in the water, now that the sun was higher, meant good weather and so did the shape of the clouds over the land.<sup>2)</sup>

老人は、星によって自分の位置を知り、日の出、日の入り、又月の出、月の入りのたびに実戦的な作戦をねり、又、様々な感慨に耽けるのである。又彼は、そのような様々な感慨の中で、人間が星や、月や、太陽を殺さねばならないのであれば、それはどんなに困難なことであろうかと想像し、その

1) *The Old Man and the Sea*, Jonathan Cape. London, 1955, pp. 28~29.

2) *Ibid.*, p. 32.

ように創られていない人間を幸福だと感じるのである。<sup>1)</sup>そしてこのような考えに立って、自然のいとなみに強い肯定の態度を示している。人間も動物も、その他すべて、プランクトンまでが同じ次元において考えられており、その立場で考えるならば、彼が今偉大な魚を殺すことは罪ではなく、自分の漁師としての義務を果すだけのことであり、鯨が弱小な魚を襲うのも、生きる手段として与えられている道をふんでいるだけの話なのである。そう考えると、あの鯨でさえも気高く、美しくさえ見えてくるのである。<sup>2)</sup>

野崎孝氏は、この作品のもつ肯定感が、従来の **Hemingway** が人間の世界だけで捕えていたものを、自然ないし宇宙の秩序の中で捕えることができるようになった為ではないかと指摘し、更にこの作品の中に、星、月、太陽、風等の言葉が頻出するのをもこのことを示唆するものと述べている。<sup>3)</sup>筆者もこれには賛成であるが、更に筆者は、**Hemingway** が、この作品において初めてこのような宇宙における人間の位置についての考え方に到達したのではなく、彼が終生持ちつづけた人間観ではなかったかと考えるのである。

## VII

以上のように、**Hemingway** の主要な作品について、その中に現われてくる太陽を追うと、いくつかの事柄が明らかになる。彼の作品には、「その日は暑かった」、「太陽は輝いていた」、「家々が太陽の光の中で眩しく輝いていた」、或いは、「雪を載いた山が陽光に光を放っていた」、「早朝の匂いを嗅いだ」等々の、太陽を中心にした天候、景色の描写が頻出するのに気がつく。このことを通して先づ、作者自身がこのような自然環境に大変敏感であったということが、当然のこととして考えられる。それは、単に視覚を通じて日の出、日の入りを感じるのみならず、嗅覚、その他すべての感覚

1) Cf. *Ibid.*, p. 74.

2) *Ibid.*, pp. 105~106.

3) Cf. 野崎孝「ヘミングウェイ」研究社、昭和40年、p. 69.

によって、即ち、全身で感じるといった感じ方である。この点については、野人としての **Hemingway** を考えるならば、当然頷けることである。

第二には、太陽の織りなす様々な陰影が、彼独特の技法に用いられているということである。それは、*A Farewell to Arms* において、Catherine が陽光を浴びて新鮮な美しさを強調され、<sup>1)</sup> 又 *The Sun Also Rises* において **Brett** がスペインの明るい太陽の下で、輝かしいばかりの美しさを放っている如きである。<sup>2)</sup> つまり、これらの方法は、所謂 **symbolic** なものとして考えられるであろう。

第三には、太陽が自然と人間との関係を暗示するかの如くに用いられているという点である。そしてこの点を重要に考えたいのである。**Hemingway** は、太陽をかみならずしも **metaphorical** にのみ用いてはいない。例えば、“**Indian Camp**” において、帝王切開による出産と、その夫の自殺という、生まれて初めての強烈な場面を経験した **Nick** が、父親の漕ぐボートに乗って、何事もなかったように静まりかえっている早朝の湖を帰途につく時、太陽が丘のむこうから姿を現わす。“**The sun was coming up over the hills.**”<sup>3)</sup> と、作者はさりげなく書いているが、筆者は、強烈な経験のあとで嵐が渦巻いているであろう **Nick** の心中に対して、静的な湖と日の出を配する作者の技巧に心にくさを感じると同時に、ここには、人間の経験や、心情とは全く無関係に動いている宇宙の存在がクローズアップされているように思われ、その秩序の中で人間を考える時、その存在がいかに小さなものであるかを痛感させられるのである。そしてこの感慨は、大海に乗り出した **Santiago** を通して感じるものと同一のものである。又、負傷した **Nick** が、オーストリア兵の死体が転がっている中で、**Rinaldi** と共に横たわり、“**separate peace**” を宣言する時にも、太陽はじりじりと二人を照らしている。

---

1) Cf. 本稿 p. 28, 註 2).

2) Cf. 本稿 p. 25, 註 4).

1) *The First Forty-Nine Stories*, p. 99.

He had been hit in the spine. His face was sweaty and dirty. The sun shone on his face. The day was very hot... Rinaldi lay still in the sun, breathing with difficulty.<sup>1)</sup>

或いは、Fossalta の塹壕の中で、激しい砲撃に見舞われ、恐怖に怯えてキリストに救いを求めるというような死の恐怖を兵士達が経験した次の日も、朝になると太陽は、何喰わぬ顔をして昇ってくる。<sup>2)</sup> このような場面は先に長編のところでも引用し、言及した如く枚挙にいとまがない。これは、Hemingway の身上である詳細な描写の故であるかも知れないが、筆者は、このような時の太陽の描写の中に、作者の自然、或いは、宇宙の秩序に対する態度を読みとるのである。つまり、人間は、この限られた生の中で闘い、腕き、苦み、束の間の快楽をよろこんで空しい生をいとなんでいる。そして非情の太陽は、このような人間のいとなみを見下ろし、見つめながら昇り、又その出て来た所へ帰るのである。それは、彼のもつ強い円環思想ともいうべきものであって、*The Sun Also Rises* のエピグラフにある伝「道の書」のあとに続く言葉<sup>3)</sup> が暗示するところのものである。ここにおいて Hemingway が述べるところの “The point of the book is that the earth abideth forever.”<sup>4)</sup> の意味が明らかになってくるのである。「伝道の書」は、紀元前三世紀の終りごろ、ストア派やエピクロス派の哲学に強く影響されて書かれたものであり、<sup>5)</sup> 従って旧約聖書の中にあっては、やや異色の書である。Hemingway のもつこのような思想も、明らかにギリシャ的な思想の流れをくむものであり、永遠に生きる自然の円環過程の中において、死すべき生をいとな

1) Ibid., p. 133. (Interchapter)

2) Cf. Ibid., p. 136. (Interchapter)

3) One generation passeth away, and another generation cometh : but the earth abideth for ever. (Ecclesiastes, 1 : 4.)

4) Cf. Carlos Baker, *Hemingway : The Writer as Artist*, p. 81.

Cf. Philip Young, *Ernest Hemingway : A Reconsideration*, p. 87.

5) Cf. 泉治典「旧約における虚無」(「ニヒルと無」, 至文堂, 昭和42年, p. 44.)

まねばならぬ強いニヒリズムにつながるものである。つまり人間は、この世に生をうけている間に、Nick が “He must go somewhere.”<sup>1)</sup> と感じる如く、自らの行くべき所を求めてさまよい、或いは戦わねばならず、その努力すらも死によって報われるのみである。万物流転を説いたヘラクレイトスは、人生を戦いの場としてとらえ、その中における雄々しい戦いに生きた者の死を大いなるものとし、その死によって、よりよき生を獲得すると説いている。<sup>2)</sup> 我々は、この概念の中に、Hemingway における人生観の原型を認めるのである。死がこの人生における最も確実な事実であると説いた Hemingway は、自然人として、死に対するこの確信と同様の確信をもって宇宙の永遠性を把握していたのである。ここにおいて、彼をしていわしめた、“solid endorsement for sun” 及び、“solid endorsement for earth” の意義が明らかになる。そして、「日は又昇る」というこの言葉は、単なる楽観主義を示すものではなく、彼の抱いている強いニヒリズムに裏づけられたものであることが理解される。つまり、それは、「伝道の書」の、“what profit hath a man of all his labour which he taketh under the sun?”<sup>3)</sup> という言葉に端的に表わされているものである。

永遠にわたって出で、又没する自然の秩序の前に、人間のいとなみが如何に小さく、空しいものであるかを、「日は又昇る」という言葉は暗示している。斯くしてこの言葉は、単に *The Sun Also Rises* という一作品のエピグラフである。に止まらず、Hemingway のすべての作品に対するエピグラフであるといえよう。

---

1) “The Battler”, *The First Forty-Nine Stories*, p. 123.

2) Cf. 村治能就「ギリシヤ的ニヒリズム」(Ibid., p. 24.)

3) *Ecclesiastes*, 1 : 3.